

高大接続改革、新学習指導要領の視点で見る 学習者中心の評価と ポートフォリオの役割

大谷大学 教授
中央教育審議会 初等中等教育分科会委員
荒瀬克己

あらせ・かつみ ● 1953年生まれ。京都市立堀川高校校長、京都市教育委員会教育企画監等を経て、2014年4月より大谷大学文学部教授。05年以降、中央教育審議会初等中等教育分科会、教育課程部会、キャリア教育・職業教育特別部会、高等学校教育部会、高大接続特別部会、教育課程企画特別部会、高大接続システム改革会議等の委員を歴任。福井大学教職大学院客員教授ほか役職多数。

多面的・多角的な評価や、幼稚園から社会まで学びをつなぐことの重要性が増すなか、「ポートフォリオ」の果たす役割とは何か。中央教育審議会初等中等教育分科会や児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ等の委員を務める荒瀬克己教授に、高大接続改革や学習指導要領改訂における議論の原点に立ち戻りながら、お話を伺いました。

取材文／堀水潤 撮影／平山論

自己肯定感や学習意欲の低さは 評価が原因ではないか

今春、告示された、新「高等学校学習指導要領」には、「資質・能力を育む主体的・対話的で深い学びの実現」、「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立」など、さまざまなテーマがうたわれています。

そのなかにあつて、私が深く共感しているのは、学校教育において主体となるのは生徒だ、という当たり前のことが強調されている点です。

例えば、第一章総則の第一款の1。片方だけ読むと気付かないのですが、現行学習指導要領との対照表を使ってみると、順序に違いのあることがわかります(☒1)。内容としては同じことを言っているのですが、「生徒」をいちばん前にもってきているのです。細かいことかもしれませんが、これは明らかに意図した変更であり、こうしたところからも、生徒に視点を置

くことを強く意識した学習指導要領なのだと感じています。

さて、今回新たに「前文」が設けられたのですが、その前半部に、「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに」という文言があります。ここでも、「一人一人の生徒が」と、生徒を主体としているわけですが、ここで注目したいのは「自分のよさや可能性を認識する」という部分です。本来、若者は可能性にあふれているはずなのに、彼・彼女らが自分のよさや可能性を認識できていないかということ、そうとは言えない調査結果が多く出ていることはご承知の通りです。国際比較でも、米中韓に比べ、日本の生徒は、「自分には人並みの能力がある」という思いをもつ割合が低く、「自らの参加により社会現象が変えられるかもしれない」という意識も低い(※)。いわゆる自己肯定感の低さの表れです。学習意欲に関係する項目も然り。知識や思考力といった後天的に得られ



る能力と違い、学習意欲とは本来、人が生まれもった能力であるはずなのに、年齢が上がるにつれて低下していく傾向があるのはなぜでしょう。

原因の一つとして、私は、評価の問題が大きいと感じています。評価といっても、一通りの流れが終わったときに行われる総括的评价ではなく、形成的评价。一般的にどうかは別として、私はこれを、成長を促すための過程の評価と捉えています。それが十分ではないのではないかと。個々の生徒に寄り添う評価になっていないのではないかと。生徒が本来もっている力を発揮できなくなるような、次につながる評価はできないものか。それには、生徒との対話を深め、さまざまな視点から生徒を見る必要があります。

人を評価することなどできないというところからのスタート

ところで、私自身は、「果たして人を評価することなどできるのだろうか」という思いを強くもっています。京都市立堀川高校で校長をしていたとき、こんなことがありました。

担任との進路面談で、「宇宙の始まりについて研究したい」と言った1年生

がいました。その生徒の成績は最下位付近。「そんなことよりもまず勉強だ」と指導するケースもありうると思います。ところがその担任は、どのようにして宇宙の始まりを探るのかと、身を乗り出して尋ねたそうです。生徒は真顔で、「望遠鏡で見ます。光学望遠鏡ではなく、電波望遠鏡を使います」と答えました。「そうですか。では、日本一の電波望遠鏡はどこにあるの?」「国立天文台です」「そこで研究したいわけだ」「はい」「大学はどう考えている?」「電波望遠鏡で研究できる東京大学に行きたいです」。そこで初めて担任は成績表を示して、「相当がんばらないと。しっかり勉強してください」。彼女は深くうなずいたそうです。

3年後、その生徒は第一志望にこそ合格できませんでしたが、後期試験で、電波望遠鏡に強い別の国立大学に合格しました。そして4年間学んだ後、晴れて東京大学大学院に進学。学位取得後、念願が叶って国立天文台に勤めることになりました。その後、米国の研究所での勤務も経験。科学雑誌に論文が掲載されるなど、研究を続けています。

彼女は振り返って、「あのとき、先生に話を聞いてもらえたことが、自分の自分につながっています」と語ったそうです。この話は、滅多にないレアケースでしょうか。この担任の対応は珍しいかもしれませんが、しかし、相手の思いや考えを受け止めて指導するのは、教育の原点です。成績だけでは、彼女の将来を予測できなかったという事実は、私たちに、生徒を正しく評価することの難しさを示しているように思います。

学校教育における評価活動は、そうした謙虚さからスタートする必要があるのではないかと思うのです。もちろん、実際に「やったこと」に対する結果について評価をくださことは必要です。さきほどの総括的评价にどう取り組むかということは重要な課題です。しかし一方で、生徒本来の力というものも考えると、本当に評価したときにはならないのは、先ほどの例から見えるのではないのでしょうか。少なくとも、学校教育における評価は、

そもそも、人を正しく評価することなどできるのか

図1 高等学校学習指導要領・新旧対照

●現行高等学校学習指導要領(平成21年3月告示)

第1章 総則 第1款 教育課程編成の一般方針

1 各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、生徒の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態、課程や学科の特色、生徒の心身の発達の段階及び特性等を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

●新高等学校学習指導要領(平成30年3月告示)

第1章 総則 第1款 高等学校教育の基本と教育課程の役割

1 各学校においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの章以下に示すところに従い、生徒の人間として調和のとれた育成を目指し、生徒の心身の発達の段階や特性、課程や学科の特色及び学校や地域の実態を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとし、これらに掲げる目標を達成するよう教育を行うものとする。

下線は編集部による

※(独)国立青少年教育振興機構「高校生の生活と意識に関する調査報告書」(2015年8月)および(財)一ツ橋文芸教育振興協会、(財)日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」(2009年2月)をもとにした文部科学省作成資料より

次につながるものでなければ意味がありません。なぜなら、評価をする相手は、「これから」を生きていく存在なのですから。

先のことなどわからないが、それも含めて、「これまで」と「いま」を、「これから」にどうつなげていくか。次につながる評価、もつといえ、学習意欲を高める評価こそ、学校教育における一連の評価活動であるべきだと、私は思っています。

多面的・多角的な評価とは 評価項目を増やすことではない

多面・多角という響きから誤解を生みやすいのですが、多面的・多角的な評価とは、単に評価項目を3から7に増やすという、数の話ではありません。むしろ評価する側の姿勢の問題です。テスト結果という生徒の二面だけではなく、さまざまな面を見る。結果だけではなく過程、つまり、そこに向かう努力や、失敗から学ぶ態度なども含め、さまざまな視点で生徒を見るということです。

最も単純なのは、複数の教員が評価に関わることでしよう。堀川高校の進路検討会では、担任、進路担当、教科担当など十数人が集まり、一人の生徒をいろいろな角度から捉えることで、希望する進路実現につなげよう

としていました。それで生徒のすべてが見えるとは言いませんが、少なくとも二人で見ているよりは、浮かびあがってくるものもあるだろう、という発想です。

来年度から始まる「高校生のための学びの基礎診断」も、教員からすれば、生徒を多面的・多角的に見る際の二つの重要なデータであり、また生徒との対話のタネとしても役に立つでしょう。ものを考え、判断し、行動する基は、やはり知識であり、知識を活用する力です。そうした基礎学力がどの程度習得されたかというデータをもとに、指導の改善はもちろん、学習意欲の喚起を促すためのツールになることを期待しています。

評価のための対話のタネとなる 学びの足跡IIポートフォリオ

これも堀川高校での例ですが、自分で決めた課題に年間を通して取り組む総合的な学習の時間「探究基礎」において、教員が何を評価の対象にしたかという点、当然ですが論文やポスターなどの成果物です。授業への取り組み具合もそう。

それらに加えて、生徒自身が書く振り返りの文章が重要な意味をもっていました。そこにはテーマを選んだ理由や取り組みの過程で感じたこと、工

「これまで」と「いま」を、 どう「これから」につなぐか



した、学びの足跡としてのポートフォリオや、そうしたものもベースに自分の在り方・生き方についても考える「キャリア・パスポート(仮称)」(12ページ参照)も、生徒を多面的・多角的に評価するうえで、また、「対話のタネ」として少なくない役割を果たすでしょう。

人は忘れる生き物ですから、生徒にとつても、「自分がどんなことをして、どんなことを考えてきたか」を振り返り、未来につなげるための貴重な記録となるはずですよ。

夫してうまくいったときの喜びや失敗から学んだことなどが生き生きと書かれています。授業を通して生徒が身に付けた力や成長の様子を教員が読み取るうえで、これほど貴重な材料はありません。ただし、読み取るには、教員の力が必要になります。あたりまえですが、評価することは楽ではありません。

先ほど述べたように、生徒の成長を促す「過程の評価」はとても重要です。その点で、学習過程のさまざまな成果物や作品、感想、記録を集積



一人ひとりの生徒に対し、敬意を払うということ



そうした材料が大学入学者選抜に活用されるのも大いにけっこう。ポートフォリオの中から、生徒自身が必要な部分を抽出し、「活動報告書」などの形で表現し、大学に提出することで評価の対象になる。やれもすれば、担任の文章力に左右される推薦書ではなく、生徒自身の言葉が届くのなら、大学にとつては、入学後の指導への活用も含めて、重要な資料になるはず。志望理由書を書かせてきっちりとしているような大学は、既にその意義について、知っていると言えます。

**評価とは時間がかかるもの
読み取る力がなくては意味がない**

先ほども述べたとおり、せっかく対話の大事な材料となるポートフォリオなどのツールも、教員に読み取る力がなければ、「ああ、そうですか」で終わってしまいます。「英検2級」と書いてあるのを見て、「すごいね」で済ますのではなく、「なぜ取ろうと思ったのか?」「そこまでに、どういう苦労や努力があったのか」などと教員が問いかけを重ねていくことで、生徒自身の自己理解を深めていくことになるでしょう。あるいは、生徒自身が気付いていないことを気付かせ、視野を広げるような指導にもつながるはず。冒頭、「生徒主体」という話をしま

したが、それは、個々の存在に対して敬意をもって接するということでもありません。ポートフォリオに記録されていることについて、しっかりと受け止め、教員自身の言葉や生徒とのやりとりを記録として残し、次回、「前はこんな事を言っていたよね。今はどう考えているの?」と問いかけ、生徒の成長にどうつなげていくかを考える。本来、評価とはそういうもの。だからとても時間がかかるのです。

「そこまでする余裕がない」という先生方の状況を知らない訳ではありません。ただ、評価以上に優先する仕事はないと私は思っています。成長を促すための過程の評価は教員の本務ですから。

**すぐには変えられなくても、
変えようと思うことが大事**

もちろん、そのための時間の確保や教員の資質向上のための研修といった課題は、現場レベルだけではなく、国も自治体も、そのための条件整備を真剣に考えないといけません。

評価のあり方もそうですが、取り組みが一気に変わることは難しいかもしれません。けれど、理念を忘れない限り、少しずつ変わっていくとも思えます。簡単に変わらないとしても、「こう変えていこう。変えていきたい」

と思いつけることが大事です。そうすると、できていないことに対して、あたりまえですが、「できていない」と認識することができる。そこから、またスタートです。

高大接続改革について言えば、単なる入試改革ではなく、高校教育改革や大学教育改革を含む、一体的な教育改革として始まりました。高大接続システム改革会議の第1回目に、私は次のような発言をしました。

「高校を卒業したら、生徒と高校との関係は切れるかもしれませんが。大学を卒業したら、大学と学生との関係も切れるかもしれませんが。しかし、彼らはそのままずっとこの社会で生きていくわけでありまして、その際に必要な力を、高校教育、大学教育で連続してつけていかなければならないはず」

この思いは今でも変わりません。これからの社会を生きていくために、必要な力とは何かを考え、学校教育の責任として育んでいく。幼・小・中・高・大での学びを重ねて、社会へつないでいく。

改革の根底にある、こうした理念を忘れずに、できるところから取り組んでいく。それがだいじだと思えます。